

## A／B パターンの生成と心理学的実践工作

向井 敦子      深谷 澄男

### 〔1〕はじめに

筆者らは<sup>(1)</sup>，コトとモノとの相補的關係態が，ミズカラの表われとしてパターンを生成し，オノズカラの現われとしてパターンを実現することに着目して、『スル×ナル×アル×イル』という心理学的循環関係を仮説し，自分自身にまつわる実践的諸体験を省察しながら，その仮説を練磨する努力を続けています。このような発想に，基本的意義が内在しているらしいと洞察することはできるのですが，他方で，その発想と洞察を思うように表現できない不全感に苛立ちを覚えることがあります。未だ熟し切れてはいないのですが，本論で，一つの区切りをつけておきたいと思います。

筆者らにとって理論とは，私たち自身の実践的工作を先導する諸仮説を再帰的構造態として系譜づけるシステムです。それは，この現場に自覚的に踏み留まって，相互障害の成り行きを見とどける視点を与え，相互協働的な革生変換を図るために，相互輔生的な対応工作を可能にする実践的仮説系でなければなりません。だから，自閉的理論に陥らないためにも，脈絡を欠いた個別主義に埋没してしまわないためにも，「要するに人間をどのように看做しているのか。」という視点から，既存の認識に内在している暗黙知を自覚的に省察しながら，生命を担い，生活を営む人間を看取する私たちの実践に即した視点を，より豊かにする努力を積み重ねなければなりません。

そこでまずは，私たち自身にまつわる諸体験を俎上に載せ，既にそこで，自分がミズカラ分け与え，オノズカラ分け与えられているコンテクストを省

察するために、あえて他の視点へと置き換えてみます。すると、その視点の移動に随伴して見えてくる対自的世界と対他的世界とが、異質というよりはむしろ、即自的には同型的に現われてきます<sup>(2)</sup>。そして、このような同型的な通即性を基盤にして、対立と対応が循環的に関係づけられながら、「自／他」の棲み分けが成り行くことに改めて気づきます。

能動的な視点変換に随伴して浮び上がってくる「認識するコト」と「認識されるモノ」との再帰的な循環関係を手掛かりにして、自閉的対立から解放的対応へと変換する視点の表現を、複合的かつ重層的に系譜づけてみることに本論の基本課題です。それは、あくまでも無に帰することを覚悟したうえでの仮説系であり、実践的工作者としての私たちの言動を律するために、仮りに縫いあげてみた「しつけ糸」に過ぎません。だから、しつけ糸そのものではなく、しつけ糸が、どのような同型的関係態を再帰的に織りあげてゆくかを看取していただき、もって、読者自身に即した仕立てあげを促すために、本論では、あえて読者の直感に訴えながら議論を進めてゆきます。いくつかの心理学的範例を介在させて、なじみのない用語が、初めのうちは無定義のままに使われますが、コトとモノとの相補的な「A／Bパターン」を直覚的に徴候化するために、あえて読者の現象的了解の同型性に依拠しつつ、視点を縦・横に揺れ動かしながら、再帰的構造態の自覚に即して、諸定義を螺旋的に積み重ねてゆく構成法を採ることにします<sup>(3)</sup>。

## 〔2〕相互障害の発生と成り行きの見とどけ

躰糸は、身を美しく律するための仮縫で<sup>(4)</sup>、いつでも引き抜けるように適度に緩めておくものです。締めすぎると、縫糸となって身を縛りつけてしまいます。まずは、対自的躰糸を対他縫糸と錯誤することによって、即自的に発生してしまう相互障害の成り行きを直感していただくために、読者自身にまつわる諸体験を重ねあわせを諮る範例を、いくつか心理学的に仮想してみます。例えば、ある教師が、生徒たちに集団暴行を受けるという事件が発生したとします。その生徒たちへの処分を巡って、百出する教師たちの意見

を集約すると、以下に、範例として構成した両極端の意見の間のどこかに、それぞれの意見を位置づけることができるでしょう。

意見A：問題のある生徒を締め出すのではなく、教師一人一人が血みどろになって指導しなければならない。学校というところは、どんな生徒に対しても教育的配慮をもって対処すべきである。

意見B：問題のある生徒に断固とした態度をとらなければ、いたずらに生徒をつけあがらせるだけである。学校の権威を保ち、学校が社会に対して負っている責任を果たすべきである。

読者自身が、このような事態の当事者だと想定してみてください。意見Aを聞いて「なるほど！」と思い、意見Bを聞くとまた「なるほど！」と思うでしょう。そして、意見AとBが組になって提示されると、どちらの意見も適切であり、かつ、不適切だと思えてくるはずです。このように、一対になった両項のどちらに接近しても、同時に、その項から回避したくなるような心理的二重拘束状況を、「ダブル・バインド」と呼びます<sup>(5)</sup>。

教師ならば、生徒のために教育的に配慮するのは当然のことです。そのような即自的な心情の発露として、意見A寄りに事態が収束することが望ましいと思います。だからと言って、ほかでもないこの私に、秩序を守ろうとしない生徒に対処しろと言われても困ります。それこそ、孤立無援の中で血みどろになって、自分の生活が破壊されてしまう恐れがあります。このような対自的に覚知される恐れが、B方向への反転を動機づけます。

私たちは、対自的かつ対他的に共同生活を営んでいるのですから、問題を起こした責任を問い、相応に処罰するのもまた、社会的常識として当然のことです。それに、皆が認めるルールに則って、意見B寄りに事態が收拾されれば、自分が巻き込まれなくて済みます。しかし、そんなことをあえて公言して、教師としての私の真情を曲解されたら困るし、同僚や生徒に管理的だと詰問されたら返す言葉もなくなります。身を守るためには、大勢に従うのが得策です。だからと言って、まわりの顔色をうかがっているばかりでは、教師としての自分の立場がなくなってしまうようで、なんとなく不安でなり

ません。このような即自的に覚識される不安が、再びA方向への揺れ戻しを促します。A方向に振れすぎると、即自的表われを否定する対自的恐怖が現われ、B方向に振れすぎると、対自的表われを否定する即自的不安が現われます。いずれにせよ極端に振れてしまうと、それぞれの極性を意義づけている二重否定性が現われてきて、私たちを心理的に拘束します。

私たちは、「～として当然～するべきだ・べきでない。」という思いに、既にとらわれてしまっています。相手に対して「すべき・でない」と言うときは気が楽で、なにか自分が優位に立ったように感じます。逆に、たとえ自分がそう思っていることでも、相手から「すべき・でない」と主張されると、なにか劣位に置かれているような気がして、内心は反発するのですが、それでもやはり抵抗しがたいものを感じてしまいます。不思議なことですが、「すべき・でない」という断定が、自分を優位に立たせるだけでなく、逆転して、かえって自分を劣位に落し込めてしまうことがあります。

言うまでもなく、一般に、私たちは優位に立って相手を縛ることを好み、劣位に置かれて縛られることを嫌います。だから、心理的に拘束する二重性を断定的に割り切って、二重に動揺している相手に対して優位に立とうとします。つまり、既に縛られている二重性に拘束されないようにするためには、一方で、相手を縛る権利をミズカラの権利としてオノズカラ保証されていると正当化し、他方で、相手が縛られることをオノズカラの義務としてミズカラ負うべきだと断定しなければなりません。このような割り切りができないままに二重に縛られてしまうと、本来はミズカラ担っているはずのものが、ミズカラ負うべきことへと反転してしまいます。その結果、本来はオノズカラ生成していることが、オノズカラ定められた義務として現われて縛りつけてゆきます。このような相互循環関係の中で生きている私たちは、一方で、ミズカラ発生させているモノをオノズカラ生成しているコトと断定することで優位に立ち、他方で、ミズカラ方向づけているコトをオノズカラ方向づけられているモノと断定されることで劣位に置かれてしまいます。しかし皮肉なことに、断定的に優位に立とうとするほど、ミズカラ主張することがオノ

ズカラ方向づけられてしまい、逆転して、劣位に落とし込まれてしまいます。そのことへの恐怖を覚知するほど、自分の立場を対他的に権威づけてゆきます。ここで、「コト／モノ」と「ミズカラ／オノズカラ」との二重反転的拘束性が、私たちが既に拘束している「優位－劣位」の対立的分裂の実現を媒介しているらしいと直感的に看取することができます。

範例として「教師－生徒」関係をとってみると、一般的に言えば、教師が縛る側で、生徒が縛られる側ですが、その縛る教師もまた、ミズカラ縛ることにオノズカラ縛り返されています。例えば、スカート丈は膝下5センチなどと生徒を事細かに縛れば縛るほど、その校則を守らせるために、教師は多大なエネルギーを割かなければなりません。そのため、縛り切れない緩みがそこ・ここで発生し、生徒たちは、教師の顔色を窺いながら初めは散発的に、しだいに公然と傍若無人に振る舞うようになります。個々の教師の手に負えなくなると、教師集団としての取り組み体制が強化され、そのことが逆に、「すべき・でない」という命令・処罰体系となって現われ、生徒だけでなく教師もまた縛りつけてゆきます。ミズカラ発生させている管理体制を当り前だと思い込むことによって、その管理体制にオノズカラ縛られているとき、教師は、「どうせ、こういう生徒だから、何を言っても仕方ない。」と、他方で生徒もまた、「どうせ、こんな教師に何を言っても分かってもらえない」と、それぞれが相手を、そして自分を、傍観的に決済して引きこもってゆきます。ここで私たちは、二重反転的拘束性を媒介として、主観的な因果関係の思い込みを相互循環的に生成してしまう、相互障害の発生と成り行きを看取することができます。そこでは、躰糸を縫糸と錯誤する思い込みによって、相互に縛りつけ、相互に縛り返されています。

目を転じて、教師は、服務規定などによって既に事細かに縛られていることに反発します。そのような反発に対して、管理責任者としての校長がいみじくも代弁するように、ここではもはや、私人としての思惑が関与する余地はなく、公人としての責務を果たすかどうかの問題へと転化します。その結果、縛ることが縛られることへの反抗を誘導し、縛る体制に対抗する縛り返

しの体制を既定化させます。例えば行政当局は、教育現場の活性化を図るためと称して、主任制度や強制人事異動制度などを導入しようとしませんが、教師組合は、これらの諸制度が管理体制を強め、教育現場の混乱を謀るものだと称して反対します。組合が反対するほど、当局は断固とした態度を取るようになり、当局が強行するほど、組合は対立姿勢を強めます。その結果、組合の意向の代理者として個々の教師たちは、当局の意向の代理者である管理者との対立を強制され、当局の意向を代理する管理者もまた、組合の意向の代理者である教師との対立を強制されてしまっています。ここではもはや、両者ともに、対立そのものが当り前のことだと既に思い込んでいます。その思い込みを媒介として、個は代理者として対立させられているだけなのですが、その対立を、オノズカラのコトと断定することで優位に立とうと試み、相手に対しては、ミズカラの引き起こしたコトとして責任を追及します。しかし、いくら責任を追及しても、個はもはや代理者でしかありませんので、その代理機構の中で、容易に責任を他に転嫁することができます。かくして、責任を回避しあうだけの泥仕合が実現します。

振り返ってみれば、生徒は自立したいと願い、教師もまた生徒の個性を伸ばすことを望んでいるはずです。同様に、教師組合は教育現場の自律を図りたいと願い、行政当局もまた特色ある教育現場の活性化を計ることを望んでいるはずです。目指すところは同じはずなのに、結果として、相互に障害を仕組んでしまっているとは、なんとも不思議であり、やりきれない思いがします。本章で見とどけた範例を手掛かりにして、二重拘束性を割り切って対他的優位性を表わすことが、即自的劣位性の現われとなり、その二重否定的逆転への恐怖と不安が相互障害を先導しているらしいと看取することができました。このような示唆を自覚的に汲み取るために、まずは、お題目を唱えることをいったん諦止してみても、相互障害の発生条件と生成条件を真剣に省察してみなければなりません。「要するに人間をどのように看做しているのか。」ということを実感的に省察することなく、真に自律的に自立した個性化を希うことはできません。そこで、次章以降では、コトとモノとの再帰的

な変換関係を複合的かつ重層的に系譜づけながら、私たち自身の実践的工作を先導する仮説系を構成する試みをします。

### 〔3〕再帰的構造態としてのコトとモノの相補性

唐突ですが、ダニの世界を覗いてみます<sup>(6)</sup>。ダニの雌は、交尾を済ませると灌木の枝先によじ登り、その枝下を温血動物が通過するとポトリと落下して、その動物の皮膚を通して血液中に卵を植えつけます。いろいろなモノが枝下をランダムに通過するのですが、温血動物であるという類性にダニの落下行動が対応し、非温血動物であるという類性にダニの非落下行動が対応するという連関関係を知ることによって、私たちは、ダニが棲み分けている世界を描き出すことができます。

カタツムリの手前に、渡り棒を少し間隔を開けて置くと、適切な間隔のときには棒を渡ってゆきます。その渡り棒を、1秒間に1～3回の頻度で接近と回避の振動を加えると渡ってゆきません。ところが、1秒間に4回以上の振動にすると渡ってゆきます<sup>(6)</sup>。カタツムリの歩測行動を実現する条件と、実現しない条件とのコンテクストを手掛かりにして、私たちは、カタツムリの世界を彩る不動性と変動性を差異づけることができます。

私たちは、生体が既に棲み分けているコンテクストを看取するにあたり、まずは認識対象として生体を扱い、対象行動の「実現：非実現」パターンを措定し、その行動パターンによって括られているモノに共通する差異性を対他的に構制化します。つまり、ダニの落下行動と非落下行動を、モノ自体ではなく、動物の温血性と非温血性を括る差異に対応づけ、カタツムリの渡り行動と非渡り行動を、渡り棒の不動性と変動性を括る差異に対応づけます。次に、モノを括りの徴候として同化する機能態として生体を扱い、その括られたモノの類性を、生体が棲み分けているコンテクストを表わすメッセージとして対自的に構制化します。さらに、括られたモノの類性を生体に即して言い換え、コンテクストは、メッセージを差異づける命題であると即自的に構制化し、生体が、コンテクストに即して棲み分けていると認識できます。

ここでは、対象を認識する観測者の視点に即して、対他的にオノズカラ現われる認識対象が括るモノの差異性を、認識対象の視点へと移し換えて、対自的にミズカラ括っているコトの差異とみなすことで、対象を認識する即自的な論理を「ミズカラ／オノズカラ」の統合態として構制化しています。つまり、観測者が対象を認識する即自的論理が、認識対象が対象を認識する即自的論理と再帰的に同型であるという「看做し」の二重性に基づいて、認識対象である生体の棲み分けが命題として認識されます。

対他的現われと対自的表われを、即自的な看做しによって再帰的同型性の表現と構制化する認識の筋道を、本論の基本的前提として自覚的に受け入れることにします。そして、生体が世界をミズカラ棲み分け、オノズカラ棲み分けていることを基本的事実として認定します<sup>(7)</sup>。さらに、このような前提と認定に基づいて、生体が生命を担い、生活を営むことを認識するために、棲み分けを関係づける構造を構制化できるはずだと仮定します。

この基本仮定に基づいて、棲み分けを「～ならば～実現：非実現する。」と関係づける命題の表現であると定義します。そして、その棲み分け命題を構成する「～ならば」という条件の集成態をコンテキストと呼び、条件に即応して「～実現：非実現する」と帰結する論理をメッセージと呼ぶことにします。生体活動に即して言い換えると、コンテキストは事態を命題として括るコトの表われであり、メッセージは事態を命題として帰結させるモノの現われです。そこで、事態を括り分けてミズカラ活動するコンテキストへと変換する論理の関係態を『コト』と定義します。そして、コンテキストへの変換をオノズカラ帰結させるメッセージの徴候態を『モノ』と定義します。このように定義することで、変換可能態である命題性と変換実現態である心理論理性との対応関係を、コトとモノとが循環的に補いあうことの表現として認識することができます。そこで、可能態として既存するはずの差異の命題が関与することで、括られるモノの類性がメッセージとして現われ、同時に、可能態として既存するはずの類性の徴候が関与することで、事態を括る命題がコンテキストとして表われると仮説することができます。



この仮説は、コトなくしてモノは実現しえず、モノなくしてコトは実現しないことを主張しています。だから、コトとモノとは相補的に不可欠な一対の項であって、本来的に、両項を分断して考えることはできません。もちろん、棲み分けの事実を理解しようとするときにはまず、現われたモノの類性を手掛かりにしてコトの差異性を命題化してみなければなりません。このような対他的視点に留まるだけならば、コトに対するモノの優位性を帰結することができます。しかし本論では、私たち自身の実践的工作を先導するために、可能態としての「モノ」が、実現態としての「もの」へと変換する条件関係を発生的に系譜づけようとしているので、もう一步踏み込み、私たち自身を組上に戴せる対自的視点を採ることで、対他的視点の妥当性を再検討しなければなりません。さらに踏み込んで、対自的に構成された仮説系に即して私たち自身の言動を律することではじめて、対自的に仮説された実践的工作の原理を、即自的視点から改めて権利づけることができます。このような即自的視点に立つことへの決意の表われとして、モノに対するコトの優位性を仮定します。なぜならば、一方で、対自的にモノとして現われる私たち自身が、即自的には実践的命題を実現するコトとして表われ、他方で、対他的にはモノとして現われる他者もまた、私たち自身と同型的に実践的命題を実現するコトとして表われるからです。私たちのできることはただ、対自的な表われと看做すことを、即自的な現われによって対他的に権利づけてみることだけだと自覚しています。このような自己限定性を自覚しながら、O. S. ウォーコップ<sup>(8)</sup> の「A／Bパターン」の構想を改編した安永浩<sup>(9)</sup> の定義に依拠して、コンテクストの即自的な実現可能態である『コト／モノ』の相補的関係を、次のようにパターンとして定義します。

定義1 相補的「A／Bパターン」（生－駆動的相補性）

①相対的不可欠性

一対としてのA項とB項が、相補的に他項を必要とする。

②非対称性

②a A項の公理的自明性

既に棲み分けている『コト』としてのA項

### ⑥ B項の論理的従属性

そのつどの棲み分けを先導する『モノ』としてのB項

この定義1によって、差異づけるコトと差異を先導するモノとの相補性、およびモノに対するコトの公理的優位性を主張します。そして、コトとモノとの再帰的關係態を私たちの出発点として、これから、図1で表わすような四肢構造態を複合的・重層的に積み重ねてゆきます。注釈をつけておきますが、最近になって廣松渉による「共同主観的存在構造」の構想に接し<sup>(10)</sup>、『スル×ナル×アル×イル』という循環關係態についての私たちの発想との

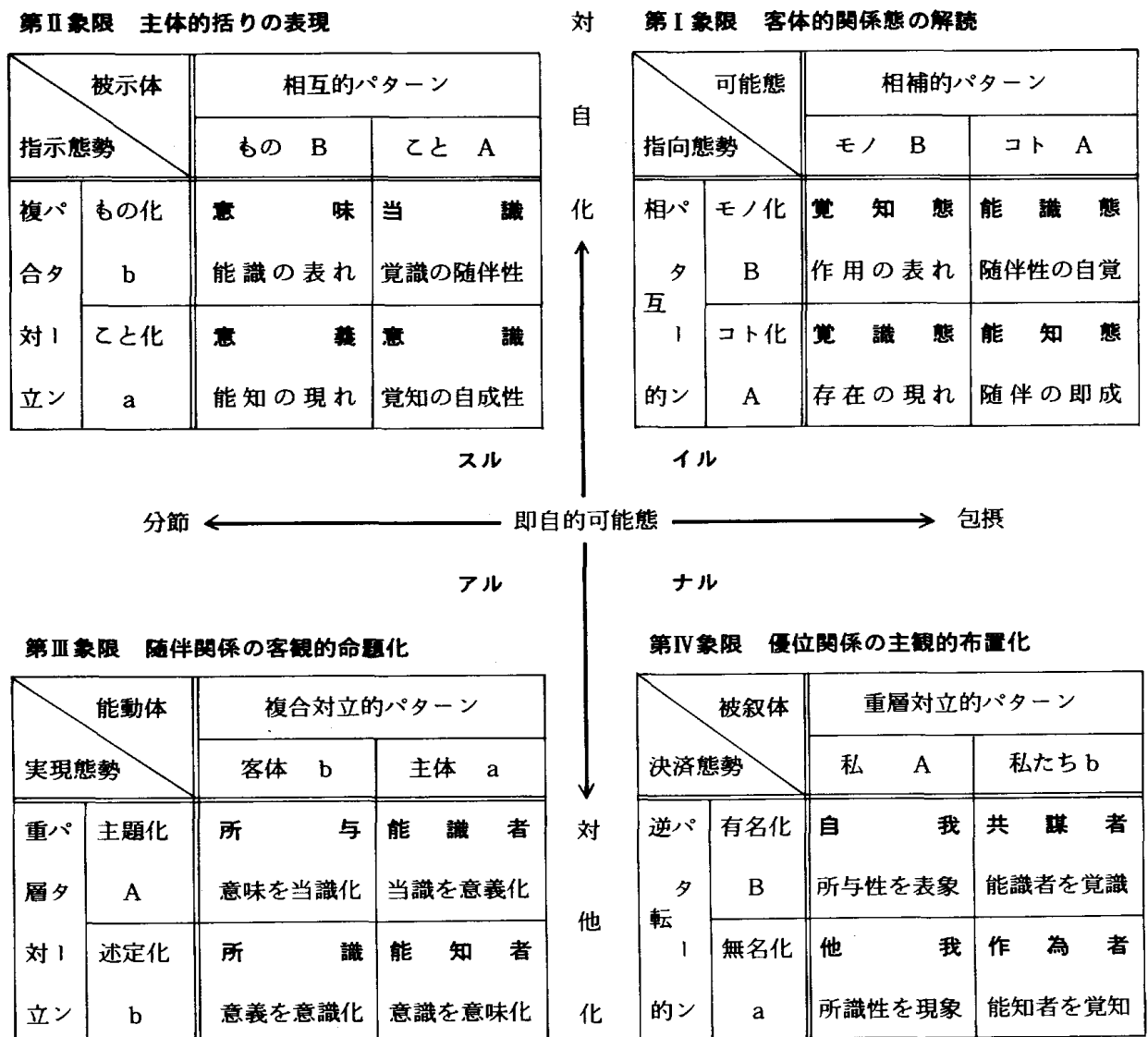


図1 A/Bパターンを生成する重層的・複合的な再帰的構造態

類縁性を知って驚いています。未熟な私たちの発想などは、廣松の壮麗かつ厳格な体系に包摂されてしまうのかもしれませんが、今は、その吸収に全力を傾注しつつあるところなので、とりあえず、廣松の用語を勝手に私たちの発想の筋道に従って流用しながら試論を続けることにします。

#### 〔４〕再帰的構造化を生成するコト化とモノ化の相互作用

ダニやカタツムリの世界を差異づける「コト／モノ」の関係は、棲み分けのコンテクストを先導するメッセージと、メッセージに連動する生体活動のコンテクストとが、前成的体制として、一義的かつ不可避的な命題となっていることを反映しています。次に、「コト／モノ」の可變的關係を、後成的に一義化する状況工作に關与する視点変換の再帰的構造を省察するために、まずは、I. P. パブロフに端を発するレスポナント条件づけの状況を概括してみます<sup>(11)</sup>。ブザー（中性刺激）を鳴らした直後に、犬の口中に肉粉（無条件刺激）を入れると、唾液が分泌されます（無条件反応）。ブザーと肉粉との対提示（強化）を反復すると、ブザーを鳴らすだけで（条件刺激）唾液が分泌されるようになります（条件反応）。

第三者の視点から、レスポナント条件づけ状況の成り行きを眺めてみると、工作するパブロフのコンテクストに、工作される犬のコンテクストが包摂されつつ、その包摂關係を表現するメッセージが分節されることと認識できます。このような「包摂的／分節的」変換に關与する第一の要件が、肉粉と唾液分泌との随伴關係です。その随伴關係を犬の視点から見てみると不可避的な表われと覚知されますが、パブロフの視点から見てみると自成的な現われと覚識されます。だからパブロフは、随伴關係の自成的一義性によって、対自的表われである肉粉の覚知と対他的現われである唾液分泌の覚識との統合態として、状況の即自的な意味を認識します。

第二の要件であるブザーと肉粉との随伴關係を、犬の視点から見ると、自成的な現われと覚識されます。パブロフの視点から見ると、可變的關係を一義化する工作の表われと能知されます。つまり、工作者としての能作性を覚

知します。第三者から見ると、工作者が状況を工作するコンテクストが、その当否によって意義づけられます。工作者であるパブロフは、自分自身の工作の表われを対他的に能知できるだけでなく、第三者の視点に立って、その工作的能因性の意義をも対自的に能識できる存在として自分自身を覚識しています。だから、対自的能識態に対他的能知態を包摂させて、「ブザーを鳴らせば唾液が分泌される。」と、対自的コンテクストを条件と帰結の随伴性を自覚して命題化します。しかし、被工作者である犬にとって唾液分泌は即成的に随伴してしまうことなので、工作的に仕組まれた表われを対自的に覚知し、その成り行きを自成的な現われとして対他的に覚識するに留まります。だから、「ブザーが鳴れば肉粉が口の中に入る。」と、即自的な成り行きに帰属させて、対自的コンテクストを今ここでの即成的随伴状況として覚識しているだけで、自分自身の能作性を能知し、能因性を能識しているわけではありません。しかし、条件反応に個体差が現われることから看取できるように、犬が対自的コンテクストを覚知し、その事態を即自的コンテクストとして覚識していることではじめて、犬のコンテクストを包摂するパブロフの対自的工作命題が対他的にも補完されます。

レスポナント条件づけを成立させる要件を視点にからめて省察してみると、メッセージをミズカラ発信することが、コンテクストをオノズカラ受信していることだと気づきます。なぜなら、コンテクストを受信しているからこそ、メッセージを発信するのに必要な調節をすることができるのであり、コンテクストを受信していなければ、メッセージの発信を調節することはできません。他方、メッセージをミズカラ受信することが、コンテクストをオノズカラ発信していることだと気づきます。なぜなら、コンテクストを発信しているからこそ受信したメッセージを同化できるのであり、コンテクストを発信していなければ、受信したメッセージを同化することはできません。つまり、発信するメッセージ（モノ）は、受信されたコンテクスト（コト）によってオノズカラ補完され、他方、受信するメッセージ（モノ）は、発信されたコンテクスト（コト）によってオノズカラ補完されます。このような

二重の相互補完性を媒介として、中性刺激である音が条件刺激としての音に変換されて、コンテクストを表現するメッセージになります。

レスポナント条件づけは、 $\{ \{ \text{音} \rightarrow \text{肉粉} \} \Leftrightarrow \{ \text{肉粉} \rightarrow \text{唾液分泌} \} \}$  という相互補完的コンテクストに支えられて、 $\{ \text{音} \rightarrow (\text{肉粉}) \rightarrow \text{唾液分泌} \}$  という継時的な随伴関係を、犬の即自態として後成的に体制化（命題化）する工作状況です。この後成的体制化のコンテクストを犬に即して表現すると、音と肉粉とが自成的に随伴する工作的コンテクストを媒介として、音というモノが、肉粉の徴候を表わすモノとして覚知されます（モノ×モノ化）。同時に、その覚知されたモノが相互補完的コンテクストの現われとなり、肉粉が自分自身の口中に入ることを先導するメッセージであると覚識されます（モノ×コト化）。パブロフは、作用体である刺激と被作用体である反応との随伴関係によってレスポナント条件づけを語ります。しかし、刺激と反応という時系列的用語では、再帰的構造態としてのコトとモノとの相補性が、コト化とモノ化の指向態勢によって補完されて、メッセージを受信かつ発信する態勢を体制化する循環関係を積極的に表現することができません。そこで、可能態を実現態へと変換する仲継ぎ指向態勢を積極的に義務づけるために、図1の第Ⅰ象限で関係づけたように、刺激を『覚知態』と呼び、モノをモノ化するコンテクストの作用の「表われ」とであると定義します。他方、反応を『覚識態』と呼び、モノがコト化されるコンテクストの存在の「現われ」とであると定義します。また、コンテクストを表現するメッセージを覚知と覚識の統合態であると即自的に定義することで、その統合態が、モノを対自的メッセージとして同化する指向態勢（モノ化）と、メッセージに合わせて対他コンテクストを調節する指向態勢（コト化）とに分節しうる態勢にあることをも看取できます。レスポナント条件づけの工作状況の成り行きを、このように解読してみると、一方で、音というモノが唾液分泌を先導する対自的覚知態であり、他方で、音というモノが唾液分泌に連動する対他覚識態であると認識できます。また、先導性の覚知と連動性の覚識の統合態の成立を指標として、 $\{ \text{音} \rightarrow (\text{肉粉} \Leftrightarrow \text{唾液分泌}) \}$  という工作状況が、 $\{ \text{音} \rightarrow \text{唾液}$

分泌]という行動体制へと後成的に変換されたと、積極的に表現することができます。そして、対自覚知と対他覚識との即自的な統合態が、他方で、対他性の覚知と対自性の覚識へと分節する可能態としてあることが看取できます。このような分節可能的統合性が、即自的可変関係態の後成的体制化に関与する基本要件ではないかと思われます。

次に、B.F.スキナーに代表されるオペラント条件づけの工作状況を、概括的に眺めてみます<sup>(12)</sup>。バーと給餌口を備えたスキナー・ボックスに入れられた空腹のネズミが、たまたまバーに触れるとエサが出てくる工作的な状況の仕組を媒介として、バー（弁別刺激）とバー押し行動（オペラント）とエサ（強化刺激）との随伴関係が後成的に体制化されます。

レスポナント条件づけでは、音と肉粉を対提示（強化）する随伴関係は非一義的で、工作者の恣意に任されます。しかし、肉粉（強化刺激）と犬の唾液分泌（レスポナント）との随伴関係は、相対的に一義的かつ不可避的です。他方、オペラント条件づけでもまた、エサ（強化刺激）をネズミのどのような自発行動（オペラント）に随伴させるかどうかは非一義的で、工作者の恣意に任されています。しかし、ネズミがバーを押すかどうかはまた非一義的であることが、両条件づけの工作状況を特徴づける本質的差異であると看取できます。オペラント条件づけでは、ネズミがバーを押すことで強化の工作が一義化され、かつ、強化工作が一義化されることで、ネズミのバー押し行動が一義化されます。このような工作状況の成立には、次の2要件が関与しています。第一の要件を、工作者であるスキナーの対他覚視点から見ると、「バーを押すことにエサを随伴させれば、ネズミはバーを一義的に押すようになるはずだ。」と、事態の成り行きへの期待が命題化されます。しかし、ネズミの対自覚視点から見ると、バーを押すかどうかは非一義的で可変的だから、第三者の視点から見ると、この工作状況の成立はネズミしただいと看做することができます。

第二の要件を、被工作者であるネズミの対他覚視点から見ると、「バーを押せば、エサが随伴するはずだ。」と、事態の成り行きへの期待が命題

化されます。しかし、スキナーの対自的視点から見ると、エサを出すかどうかは非一義的で可変的だから、第三者の視点から見ると、この工作状況の成立はスキナーしだいだと看做することができます。この二要件を第三者の視点から統合してみると、スキナーとネズミが相互に成り行きを対他のかつ対自的に看做しあう二重の関係づけが、オペラント条件づけの状況を即自的に成り行かせる基本要件となっていることを看取できます。

図1の第I象限で関係づけたように、対他視点および対自視点から見た状況の非一義性が、即自的な成り行きとして一義化されるためには、まずは、事態が「～のように成り行く。」と随伴関係の即成性を能知して、事態の仕組が即自的に「～になっている。」と命題化できなければなりません

(コト×コト化)。次には、「～になっているならば～になるはずだ。」と、即自的に看做してしまっている随伴性を対自的に能識できなければなりません(コト×モノ化)。さらに、対自的能識態が対他看做しとなって、「～すれば～になるはずだ。」と、対他能知性が再び即自的に命題化されます(コト×コト化)。その対他的な工作命題を構成する「～すれば」が、「～する」と対自化されることで、「～したから～になった。」と即自的随伴の因果性が命題化され、このコンテキストが「～すれば～になる。」と、通般的因果関係性によって自覚されます(コト×モノ化)。だから、オペラント条件づけ状況にあるネズミは、スキナーのエサ出し行動を対他コンテキストの即自的現われとして能知し、バーを媒体としてスキナーを随伴させることができることを能識します。他方でまたスキナーは、エサを媒体としてネズミを随伴させられることを能識し、ネズミのバー押し行動を対他コンテキストの現われとして能知します。つまり、スキナーにとってネズミがバーを押すという現われが、ネズミにとってスキナーがエサを出すという現われが、相互に二重に補完しあって、それぞれの即自的コンテキストに随伴する現われと看做す能知態が関与します(コト×コト化)。その結果、相互に補完しあいながら対他的に表わす随伴性の能識態が、対自的な工作の媒体として即自的に自覚されます(コト×モノ化)。

刺激と反応という時系列的用語法では、やはり、このような相互反転的に二重に補完しあう対他的コンテクストと即自的コンテクストとの循環関係を積極的に表現できません。スキナーにとってのネズミのバー押し行動は、他方でネズミにとってのスキナーのエサ出し行動は、それぞれ、対他的工作の現われとして覚識され、同時に、その覚識が即自的かつ連動的に随伴してゆくことで、対他的な成り行きの即成性を即自的に能知できます。だから、自分自身に随伴して連動する相手の反応についての覚識の循環を『能知態』と呼び、即自的コンテクストに随伴する現われを覚識して、対他的に括り返して即成的であると看做すことと定義します（コト×コト化）。対自的視点に換えてみると、ネズミにとってのバーは、他方でスキナーにとってのエサは、状況を成り行かせる媒体として対自的に能識される弁別刺激で、相手に対してエサを出してやり、バーを押してあげることが即自的な状況工作の表われとなります。そこで、相手に対して先導的に随伴する自分の反応についての覚識の循環を『能識態』と呼び、対自的な因果随伴性の表われを覚識して、即自的な工作的コンテクストに包摂されていると、対自的な括りを自覚できることと定義します（コト×モノ化）。

このように定義することで、事態の成り行きが、自分で括っている対自的コンテクストを先導していると即自的に能識するミズカラの表われと、自分を括っている対他的コンテクストに連動していると即自的に能知するオノズカラの現われが、二重に循環しつつ関係づけられていることを積極的に認識することができます。しかも、対他的な連動性の看做しが、対自的な先導性の自覚を媒介として、即自的な成り行きへの期待として統合されているだけでなく、既にそこで、対自的な優位性と対他的な劣位性とが分節する可能態としてあることを看取できます。さらにまた、次章での主題を先取りしてしまうと、既にそこでは、「～になるはずだ。」という即自的看做しが、「～になる。」という対自的判断へと反転する錯誤を孕み、対自的に錯誤された判断が即自的期待となって、「～にならないといけない。」または「～しないといけない。」という対他的当為の意識へと逆転する錯誤を孕んでい



ます。ここにおいて私たちは、即自的看做しが対自的判断あるいは対他的当為判断へと二重に反転する錯誤を孕んでいることそのものが、命題を命題化する後成的コンテクストを意識づける基本要件であると看取できます。言うまでもなく、このような意識の二重反転性は、前成的行動体制の実現には関与しません。

即自的に表現すると、レスポンド条件づけは運しだいであり、他方、オペラント条件づけは自分がとる行動しだいなのですが、いずれにせよ、後成的な行動の体制化が実現するためには、コト化する指向態勢とモノ化する指向態勢とが、相互補完的に関与しなければなりません。そこで、コトおよびモノに作用するそれぞれの指向態勢を、次のように定義します。

## 定義2 相互的「A × B パターン」（生－生成的相互性）

### ①相対的補完性

一対としてのA項とB項が、相互に他項を補完しあうことで棲み分けを命題化する系を構成する。

### ②対称性

#### ④A項の実践的規定性

棲み分けの実現方向が現われる『コト化』としてのA項

#### ⑤B項の通用的媒介性

棲み分けの媒介拠点が現われる『モノ化』としてのB項

相補的パターンについての定義1では、実践的工作を先導する仮説系を系譜づける出発点として、差異づけるコトと差異を先導するモノとの相補性を仮定し、モノに対するコトの優位性を公理としました。相互的パターンについての定義2では、後成的体制化への指向態勢としてのコト化とモノ化が仮定されていますので、A項とB項のどちらが優位であるかは、工作状況を解読する視点によって左右されます。例えば、レスポンド条件づけの状況では、音というモノがメッセージとなることだと解読すると、モノ化する覚知態としてのB項に優位性を付与することができます。しかし、そのメッセージを強化コンテクストの現われと解読すると、コト化される覚知態として

のA項に優位性を付与しなければなりません。同じくオペラント条件づけの状況では、工作的コンテクストの現われとして成り行きを解読してみると、コト化される能知態としてのA項に優位性を付与することができます。しかし、工作的コンテクストの表われとして成り行きを解読すると、モノ化する能識態であるB項に優位性を付与しなければなりません。いずれにせよ、後成的に事態の成り行きが体制化されるためには、A項とB項の指向態勢が循環的に補完しあって、即自的な工作命題が一義化されなければならないのです。そこで、そのような後成的な成り行きの関係づけを明示するために、図1で第I象限で図解するように、相補的パターンと相互的パターンとを組み合わせ、二重四肢的構造態を仮説します。

ここまでは精確を期して理論的に叙述しましたので、分かりにくかったのではないかと思います。そこで、直感に訴えて表現し直してみます。便宜的に、レスポナント条件づけ状況での犬を擬人化して、その気持ちに即してみると、覚知態は、やおら鳴ったブザーに対して「おや、なんだろう!」という気持ちの表われです。能知態は、唾液が思わず「出ちゃった!」という実感が現われています。覚識態は、ブザーに続いて肉粉が随伴したのだから、「ああ、そうか!」という了解の現われです。能識態は、随伴関係の一義性を解読して「なるほどね!」という納得する気持ちを表わします。オペラント条件づけ状況のハトの気持ちに即してみると、思わずバーに触れたらエサが出てきたものだから「あれ?」とを感じるのが覚知態で、またまたエサが出てきたものだから「あれあれ、どうしてかな?」と考えるのが能知態です。「このバーが曲者だな。」と気付くのが覚識態で、バーを押してみても「やっぱり、そうか。」と自覚するのが能識態です。

### 〔5〕二重反転態勢の複合化と重層化

モノの覚知態と覚識態との随伴性が能識態として統合されつつ、能知態の現われに即して分節される可能態としてあることを、そして、コトの能知態と能識態との自成性が覚識態として統合されつつ、覚知態の表われに即して

分節される可能態としてあることを、弁別学習の工作状況を手掛かりにして省察してみます。レスポンド条件づけの状況で<sup>(11)</sup>，第一段階として，円図形（中性刺激）と肉粉（無条件刺激）を対提示（強化）すると，犬の無条件反応（レスポンド）であった唾液分泌が，円図形を条件刺激とする条件反応へと後成的に体制化されます。第二段階では，円図形の替わりに，類似図形である楕円を提示すると，分泌量は低くなりますが，条件反応としての唾液が分泌されます（般化）。そこで第三段階では，円図形に肉粉を随伴させ（強化），楕円図形には肉粉を随伴させない（消去）という手続を繰り返すと，円図形では唾液分泌を実現し，楕円図形では唾液分泌を抑制します。つまり，犬が，円と楕円を弁別していると言えます。

円図形で条件づけた後，楕円図形でも条件反応が発生する般化の現象は，犬が，円と楕円との類似性を覚知していることを表わします。つまり，ある特定の円ではなく，円という「もの」が，覚知と覚識の統合態として関与しています。他方，楕円に対する唾液分泌量が低いということは，円と楕円との差異性を覚知していることを表わします。この覚知している差異性を能動的に意識させる状況工作が弁別学習だから，既にそこで，覚知と覚識の随伴性が分節する可能性を孕んでいます。この分節可能態を分化させるために，「円ならば強化する：楕円ならば消去する。」という，一方が他方を排除しながら依存しあう関係を工作します。このような複合的な成り行きの対立性を能知できるとき，覚知に連動する覚識態を対自的にミズカラ調節することが，覚識を先導する覚知態を即自的にオノズカラ分化させてゆきます。即自的に分化した複合関係が反転して，「これは円である：これは円ではない。」と，対自的な括りとしての意味が，強化の随伴性の能識を媒介として表われます。そして，強化の随伴・非随伴の自成性の現われとして，「円だから反応する：円でないから反応しない。」という，複合対立的命題が状況を対他的に括る意義となります。対自的括りとしての意味を対他的に意義づけることは，覚知と覚識の統合態として既に意味づけられている円という「もの」が，〔（円でないもの）ではないもの〕と，二重の否定性によって再構成さ

れたことの現われだと考えることができます。つまり、「円であるもの」という覚識態が、「円でないものではないもの」という能識態の表われとして意味づけられつつ、「円でないもの」の現われとして能知できている複合的状況の対立性によって即自的に意義づけられます。

このような複合対立的循環関係を、図1の第Ⅱ象限が表現していますが、ここで、対自的な括りを覚知と覚識の統合態として自覚できる即自的能識の表われが『意味』であると定義します（もの×もの化）。他方、複合的に対立する二重否定性を契機として覚知態と覚識態とが対他的に分化しつつ再構成されたとき、その二重否定性を、そのつど即自的な対立として能知できることの現われが『意義』であると定義します（もの×こと化）。このように定義することで、意味は、即自的に表われる意識と、対他的に現われる意義へと分化する可能性を孕みつつ、対自的に統合されている関係態であると理解できます。他方で意義は、「～である。」という即自的当識の肯定性と、「～でない。」という対自的意味の否定性とが分離する可能性を孕みつつ、対他的に統合されている関係体であると理解できます。意味と意義との関係を即自的に表現すると、複合対立的に意味を実現させる状況の成り行きを能知できることが、意味を意義づけの態勢へと変換させる必要条件だと考えられます。だから、能知が関与している意味を意義と呼び、意味を意義へと変換する能識を弁別と呼ぶことができます。

次に、オペラント条件づけの状況で<sup>(12)</sup>、弁別学習を後成的に体制化する状況工作を見てみます。第一段階では、実験箱内の照明光が赤（弁別刺激）のときに、ハトがキーをくちばしでつつく（オペラント）と、給餌口にエサ（強化刺激）を随伴させます。第二段階では、頻度が低くはなりますが、照明光が緑でもハトがキーをつつくことが確認されます（般化）。第三段階では、赤色光にはエサを随伴させ（強化）、緑色光にはエサを随伴させない（消去）という手続きを繰り返すと、赤色光ではキーをつつき、緑色光ではつつかなくなります。つまり、ハトが、赤色と緑色を弁別して、対応する行動を分化したとすることができます。

赤色光で条件づけた後、緑色光でも条件反応が発生する般化の現象は、ハトが、照明の点灯という状況の類似性を条件として、状況を命題的に括る能識態が関与していることを表わしています。つまり、赤色光というモノではなく、点灯するかどうか強化に随伴していることを能知し、状況を即自的に成り行かせるために行動するという能識が関与しています。他方、つつく頻度が緑色光のときに低いということは、赤色光と緑色光との差異をも覚知していることを表わします。この覚知している差異性を能動的に識別させる状況工作が弁別学習だから、既にそこで、能知と能識の統合態が即自的当識と対他的意識とに分化する可能性を孕んでいます。この分化を促進するために、「赤色光ならば強化する：緑色光ならば消去する。」という、一方が他方を排除しながら依存しあう関係を工作します。その工作された複合的対立性を、対他的かつ対自的に循環する即自的な成り行きとして意義づけができるとき、その対自的能識態を対他的にミズカラ調節することが、対自的意味を先導する態勢を即自的にオノズカラ分化させます。そして、対自的に分化した複合関係の意味が、改めて、即自的能識態の対立を既定する命題の存在として意義づけられるとき、「赤色光だから反応しなければならない：緑色光だから反応してはならない。」という、複合的に対立する当為命題が状況の括りとして自覚されます。このような当為命題の自覚は、自分の行動に強化が随伴するという状況の仕組についての能知態が、二重否定的に〔（随伴しない関係）ではない関係〕と意識づけられていることの現われであり、同時に、「随伴すること」と「随伴しないこと」との即自的対立性が、「～ならば随伴させる：随伴させない。」という複合的当為命題として、対自的に当識化されていることの表われでもあります。

ここで、図1の第Ⅱ象限で関係づけたように、対他的に分化していると自覚された意義に随伴して、即自的に分節した覚知態が現われる自成性を『意識』と定義します（こと×こと化）。自成性とは、自分自身にまつわる成り行きの覚知を対他化して、オノズカラの成り行きとして能知することです。他方で、対自的に分化していると能知した意味に随伴させて、即自的に分節

された覚識態を表わす随伴性を『当識（当為意識）』と定義します（こと×もの化）。随伴性とは、自分自身にまつわる成り行きの自覚を対自化して、ミズカラの成り行きとして能識することです。だから、能知と能識の統合態として意識を自成させていた関係が、複合的に対立する二重否定性を契機として能知性と能識性とが分化しつつ再構成されたとき、その能知性と能識性の統合体を当識と呼ぶことにします。このように定義することで、意識は、対自的能作の意識と対他作的所作の意識とに分化する可能性を孕みつつ、即自的に統合されている関係態であると理解することができます。他方で当識は、「～しなければならない。」という対他作的能作の肯定性と、「～してはならない。」という対自的所作の否定性とが分離する可能性を孕みつつ、即自的に統合されている関係体であると理解できます。即自的に表現すると、複合対立的に意識化される状況の二重否定的な成り行きを自覚できることが、このような自覚的意識の統合的關係体である当識を発生させる必要条件だと考えられます。だから、複合的に対立する当為命題の既定性を自覚している意識を当識と呼び、意識を当識へと変換する自覚を識別と呼ぶことができます。

即自的に表現すると、レスポンド条件づけ状況での弁別は、相対的に他律的であり、そしてメッセージに対して連動的です。だから、自覚的に覚識された意味を対他的に意義づけて覚知する弁別体制の成立は、複合的に対立している命題を、既にそこで、意味を意義づけている命題が先有しているコンテクストを、即自的に同化することの表現だと考えることができます。他方で、オペラント条件づけ状況での識別は、自律的であり、そしてコンテクストに対して先導的です。だから、自成的に成り行く覚識態を意識して、さらに対自的に当識化する識別体制の成立は、複合的に対立している命題を、既にそこで、意識の当識化を要求しているメッセージとして覚知して、即自的コンテクストを対自的に調節することの表現だと考えることができます。そこで、メッセージの包摂体として既に有ると覚識される工作状況のコンテクストを意義づける体制と、そのコンテクストが既に要求している意味の表われがメッセージであると自覚する当識化の体制をパターン化して、以下の

ように定義します。ここでは、そこにある「もの」は主体的括りの表現態として、既に指示態勢を先導しています。また、そのものを主体的に括っている表現態として、指向態勢が対象関与的な指示態勢への変換に連動している「こと」として現われます。このように、主体的括りとして表われ、かつ現われるコストekストをメタ・コンテクトと呼びますが、それは命題の命題化という二重態勢を表現しています。

定義3 複合対立的「a／bパターン」（死一回避的複合性）

①相対的排除性

複合対立的に一对の系を構成するa項とb項とが、相対的に依存しながら、他項を排除する。

②非拘束性

④a項の対他的意義性

対立的命題を対他的に先有している命題として『こと化』  
する弁別的括りの態勢としてのa項

⑤b項の対自的当識性

対立的命題を対自的に要求している命題として『もの化』  
する識別的括りの態勢としてのb項

相互的パターンについての定義2では、棲み分けの後成的体制化を仲継ぎする指向態勢を仮説しました。他方、複合対立的パターンについての定義3では、主体的に棲み分ける括りを仲継ぎする指示態勢を仮説しました。この定義2と定義3を組み合わせることで、図1の第Ⅱ象限で関係づけた二重四肢的構造態を再帰的に仮説することができます。意味づけは、即自的に括られているものを、対自的に分節している括りの表われとして自覚することです。だから、今ここで覚知された意味を、既にそこで意味を括っている能識態の表われとして、意味づけられた被指示態の分節態勢を自覚します（もの×もの化）。意義づけは、即自的に括られているものを、対他的に分節している括りの現われとして覚識することです。そこでは、対自的に肯定されている意味が対他的に否定される可能性を孕みつつ、その二重否定性によって

即自的に意義づけられています。だから、既にそこで意味づけられている被指示体を、今ここで複合的に対立している対自的コンテクストに関係づけられる対他的存在態として能知します（もの×こと化）。ここで私たちは、対自的に意味を付与された被指示態が、対他的に意義を担う客体として現われる筋道を看取することができます。

意識化は、即自的に包摂されている括りの肯定性を、対他的な二重否定性によって括り返す自成的な指示態勢の現われとして覚知することです。だから、今ここで意識されている肯定性と否定性との関係を、既にそこで複合対立的に命題化している包摂的關係態の現われとして、その指示的包摂態勢を能知します（こと×こと化）。当識化は、対他的な指示態勢を対自的な指示態勢へと反転させる複合的対立性が媒介となって、対他的否定性と対自的肯定性とが分裂する可能性を孕みつつ、指示態勢を即自的包摂態勢として自覚することの表われです。だから、既にそこで複合的に分化している対立的關係を、今ここでの即自的な当為要求のコンテクストに包摂される態勢であると覚識します（こと×もの化）。ここで私たちは、対他的に意識されたコンテクストを対自的に括る指示態勢の自覚の表われとして、即自的包摂性が主体として現われてくる筋道を看取できるだけでなく、主体的括りが、「ミズカラ／オノズカラ」の關係として二重反転的に表現されていることをも看取できます。つまり、即自的包摂態勢が関与しているときは、今ここで現われているコンテクストに自分がオノズカラ包摂されていると意識し、既にそこで表わしているコンテクストを自分がミズカラ包摂している命題であると当識化します。他方、即自的包摂態勢が関与していないときには、今ここで表われているコンテクストをミズカラ包摂していないと意識し、既にそこに現われているコンテクストにオノズカラ包摂されていないと当識化します。このような二重に反転する主体的括りの表現として、客体に対する主体の優位性が、「包摂／分節」關係の重層化として現われます。

直感的理解を促すために、第Ⅱ象限での關係づけを表現し直してみると、意味は、そこにあるものを「例のこれだよ。」と、見本として能識できてい



ることの表われです。意識は、その見本に随伴する関係を「これは、こうなんだよ。」と覚知していることの現われです。意義は、「やっぱり、これはそれか。」と差異を能知していることの現われです。当識は、「これは、こうなっているんだよ。」と随伴関係の命題を覚識していることの表われです。このように言い直してみると、状況工作のコンテクストが、メタ・コンテクストとして命題化される循環関係を直感的に看取できるでしょう。

対他的に意義づけられた被指示態勢が、対自的に当識化する指示態勢によって包摂される重層的な関係づけを分析するために、D. S. ブラウが設定した見本合わせ状況を見てみることにします<sup>(13)</sup>。オペラント条件づけの手法で、点灯した円刺激をくちばしでつつく行動を既に条件づけてあるハトを使います。刺激項として3項が壁面に設定され、中央にある長方形が見本項で、その左右にある円形が選択項です。第一段階では、選択項は消灯し、ある頻度でちらつく白色光 Lf、ちらつきのない白色光 Ls のどちらかが見本項として点灯します。第二段階では、すべての刺激光が0秒から5秒の間で消灯します（反応延期）。第三段階は、見本灯は消灯したまま、選択項を点灯します。このとき、左右いずれかがLfで、他項がLsで、点灯する左右の位置はランダムに変えます。第四段階は、見本灯で点灯した同種の白色光が点灯した選択項をつつくとエサで強化し、異種の白色光が点灯した選択項をつつくと強化しません（見本合わせ）。

このように仕組まれた工作状況では、延期時間が0秒から1秒ぐらいならば、あまり個体差が現われませんが、2秒から5秒の延期が挿入されると著しい個体差が現われます。例えば、10秒の反応延期でも90パーセントの正反応率を維持できたハトは、見本項にLfが点灯すると、頭をゆっくりと前後に振る行動を延期期間中ずっと続け、見本項にLsが点灯すると、くちばしで見本項の上部をつつく行動を続けます。延期期間中に挿入される仲継ぎ行動が、複合対立的に明確にパターン化されているハトほど反応を延期することができますが、仲継ぎ行動型が非対立的であったり、未分化であるほど反応を延期することができません。そこで、仲継ぎ行動型の自発的な分化が、

反応延期の個体差を実現するための必要条件だと看取できます。このような個体差の現象を、工作的状況の指示態勢を包摂しているコンテキストが、その個体に即した実現態勢として命題化されたことの表現であると仮定したうえで、主体的指示態勢が、自分自身に即して客観的に命題化する実現態勢へと変換される循環関係を、図1の第Ⅲ象限で仮説します。

第Ⅲ象限は、自発的に分化した仲継ぎ行動型が媒介となって、複合対立的な工作状況が重層的に体制化される関係を再帰的に関係づけています。そこで、見本合わせ状況でのハトに即しつつ、コンテキストの重層化に関与する諸要件を省察することで、それぞれの要件に関与する関係態の特性を再帰的に定義してみます。第一の要件として、見本項の意味が、「Lf は Ls ではない：Ls は Lf ではない。」と、複合的に対立する即自的コンテキストのメッセージとして、対自的に意味づけられなければなりません。だから、項として識別されている見本項が、コンテキストの差異に対応する見本として客体化され、その見本としての先導的意味が当識化されているとき、廣松渉の用語法を流用して<sup>(10)</sup>、対自的な意味の先導態としてある見本を『所与』と定義します（客体の主題化）。ここでは、「もの」そのものではなく、見本として主題化された客体的項が所与として関与します。

第二の要件として、それぞれの見本項が、複合的に随伴する強化・非強化の対立性によって、それぞれの選択項に対応するメッセージとして対他的に意義づけられなければなりません。だから、即自的に主題化されている所与としての見本項が、複合的に対立するコンテキストの意義を現わす選択項に対応づけられると意識化するとき、対他的な意義の連動態として現われる選択項を『所識』と定義します（客体の述定化）。ここでは、客体が見本項として主題化されているだけでなく、その客体が選択項に対応づけられる所識として改めて述定化されています。このように、所与と所識の統合態に関与するとき、一方で所与としての見本項が、コンテキストのメッセージとして意義づけられ、他方で所識としての見本合わせのコンテキストが、「見本項が〔Lf : Ls〕ならば選択項の〔Lf : Ls〕を選ぶ。」という判断命

題として命題化されます。このような函数連関態として所識があることを強調するために、廣松は<sup>(10)</sup>、所識を「所与以上・以外のあるもの」とか、「イデアール＝イルレアールな存在性格」として定義しています。要するに、所識は即自的事態の命題性をコンテクストとして覚識していることの現われであり、所与は所識のメッセージとして意義づけられていることの表われです。三角形を例にして言い直すと、その三角形は、三角形というものの見本項としては所与であり、三点を直線で結ぶ函数連関態の工作的命題としては所識です。だから、そこにあると意識されている三角形というものの客体性は、所与と所識の統合態の表現であって、その表われが所与として対自的に同化され、かつ、その現われを所識として対他的に調節して客体化します。客観的客体というものは、即自的可能態が、分節態勢として既に二重循環的に関係づけられていることの表現にほかなりません。

第三の要件として、即自的意味を所与として当識化し、対他적意義を所識として意識化して、事態を所与と所識の統合態として命題化できる主体的能動体が関与しなければなりません。その対自的命題に即して自発的に分化した仲継ぎ行動をパターン化して、所識化された対立意識によって対他的に意味づける主体的能動体を『能知者』と定義します（主体の述定化）。事態に能動的に関与する能知者は、対自化された意味を、対他的に複合対立するコンテクストを先導するメッセージの所与として意識化し、その複合対立的な成り行きが、自分自身の行動に即して「当然～になるはずだ。」と、対他적意識の自成性を能知することができる能動的な行動主体です。

第四の要件として、「当然～になるはずだ。」という対他적意識に即応して、「～しなければならない。」と対自的に当識化し、その対自的当識に即した事態を、「私が～するから～になる。」と即自的に意義づけることができる主体的能識性が関与しなければなりません。そこで、複合対立的事態に即して自発した即自的行動に成り行きが連動するのは、自分自身が事態の先導体としてあるからだ和对自的に意義づける主体的能識性を『能識者』と定義します（主体の主題化）。能識者は、対他적意義を対自的に対立させてい

るコンテキストに即して連動するメッセージを対自的所識として当識化し、その複合対立的な成り行きを自分自身のコンテキストによって包摂することで、「私が～するのだから～になるのは当たり前だ。」と、対他的優位性の意義づけを能識することができる主体性の表われです。ここでまた、主体性というものが、能知者と能識者の統合態の表現であることを看取できます。客観的主体というものは、対他的に包摂する同化態勢が、対自的に包摂する調節態勢によって既に包摂されている関係態の表現にはかならず、そこでは即自的可能態が二重循環的包摂態勢として現われます。

このように、客体性および主体性を、主題的かつ述定的に関係づけて命題化するコンテキストにおける主体は、対他的に自分の行動を意味づける能知者であり、同時に、対自的コンテキストに包摂して事態を意義づける能識者でもあります。能知者であると意味化すると同時に、能識者であると意義化する主題性によって主体を「自分」として自覚できます。他方、客体は対自的な意味を主題化する所与であり、同時にまた、コンテキストのメッセージとして命題化される所識でもあります。所与であるという意味を同化して当識化すると同時に、所識であるという意味を意識化する調節の述定性によって、客体の存在性を「対象」として覚識できます。そして、その覚識された対象の主体的能識性を覚識するとき、能識的对象が自分と同型的な「相手」として意味づけられます。このような主題化と述定化の実現態勢を、次の定義4のように定義し、定義3と組み合わせて、図1の第Ⅲ象限で関係づけたような随伴関係の二重四肢的構造態を仮説します。

定義4 重層対立的「A / bパターン」（死－緩衝的重層性）

①相対的自己優位性

複合対立的に一对の系を構成するA項とB項とが、相対的に他項を対象化することで、自項の主題的優位性を現わす。

②対他的拘束性

③A項の主題的自明性

対立的命題を対他的に先導するコンテキストを担っている

と自覚される主題的優位性としてのA項

⑥ b項の述定的帰属性

対立的命題によって述定されて、対他的に連動する帰属性  
によって拘束されるb項

直感的理解を促すために、第Ⅲ象限での関係づけを表現し直してみると、所与は「これは、これだ。」と同義反復的に主題を意味づけることの表われです。能知者は、「これは、こういうことだ。」と叙述できることの現われです。所識は、「これは、あれではない。」と対他反照的に主題性を再定義することの現われです。主題性の再定義を述定化と呼びます。能識者は、「これは、こうだからこうだ。」と理由づけることができることの表われです。ここで、既にメタ・コンテクストとなっているコンテクストが、さらにまた、メタ・メタ・コンテクストへと変換される関係を看取できます。

ここでは、本来的には対自的な看做しであるはずの随伴性の判断が、対他的に意義づける即自的主题性の優位によって、対他的にも客観的命題として看做される関係が表現されています。だから、看做しの二重反転態勢が即自的な拘束性として現われ、「当然～になるはずだ。」という対他的な意識に即応した当識が対自的工作の優位性によって権利づけられてしまい、即自的な客観的状況命題として「当然～になる。」と一般化されます。その即自的な一般性に包摂されて、「当然～にならなくてはならない。」ものとしての個別的他性が、その対象性を帰属的に客観化されて劣位に置かれます。ここにおいて、対他化された対象性を即自的に包摂して、「優位－劣位」の体制に帰属させる重層的関係づけが実現します。

しかし、たとえハトが自発的に仲継ぎ行動型を分化・対応させることで重層的優位性を関係づけたとしても、しょせんはブラウの仕組んだ事態に組み込まれたことの現われに過ぎません。もちろん、自発的行動型によって仲継ぎできたハトは、仲継ぎできなかった他のハトに対して、ミズカラ分け与え、オノズカラ分け与えている自分の主題的優位性を主張することができます。ところが、仲継ぎできたことで、かえって事態の仕組にオノズカラ組み込ま

れてしまい、ミズカラ劣位に置かれてしまう危険が発生します。次章を先取りすると、見本項と選択項との分化・対応関係が仲継ぎ行動型によって保持されているとき、その対応の仕組が変換されてしまうと、既にそこで自発していた仲継ぎ行動型があしかせとなり、新しい事態への対処不能をきたす恐れがあります。しかも、対他的に即自的優位性を権利づけているためになおさら、「～すれば～になるはずだ。」という思いにとらわれてしまい、既に無効となった仲継ぎ行動型をいたずらに反復するだけになりがちです。このような自己固執的な同定的反復行動は、「私が～しているのだから～になって欲しい。」と、呪術的に自己優位性を願望する主観の表われだと考えられます。ここで、このような優位性の逆転を緩衝する呪術的な思い込みとして、私たちの主観が実現する筋道を看取することができます。主観は優位関係の逆転への恐怖を緩衝しているのだから、逆転の恐怖そのものが、既に私たちを呪術的主観へと縛り返してしまいます。

このような主観によって権利づけられる即自的思念は、「私が意義づけているもの」という主体的優位性と、「私が（意義づけていないもの）ではないもの」という客体的劣位性とが分化可能性を孕みつつ、その優位性の逆転への緩衝態として即自的に統合されている呪術的意識です。だから、自分と同型的な他者として相手を意識するほど、そこには既に、主題性が帰属される位置の反転に即応して、自分の優位性と相手の劣位性とが逆転しうる可能性が孕まれていると看取できます。

## 〔6〕二重反転体制の複合的重層化としての相互障害

優位性の逆転現象を省察するために、ブラウの設定した工作状況を、逆転移行学習の状況へと仮に拡大して考えてみます。第一段階では、見本項  $S_x$  に選択項  $R_x$  を対応させ、見本項  $S_y$  に選択項  $R_y$  を対応させる複合対立的な見本合わせ状況を工作します（X系列）。第二段階では、見本項  $S_x$  に選択項  $R_y$  を、見本項  $S_y$  に選択項  $R_x$  を対応させる複合対立的状況へと逆転させます（Y系列）。第三段階では、再びX系列へと移行します。このよう

に、複合的に対立するコンテクストが逆転しながら移行する状況は、私たち自身の日常に即して顧みると、特殊であるよりはむしろ一般的にありふれていることだと気づきます。しかも、第一段階の複合対立的状況の工作命題に即して、ハトが自発的に仲継ぎ行動型を分化・対応・保持するほど、その既成の即自的優位性が障害となって、第二段階のコンテクスト変換によって混乱してしまうのではないかと考えられます。このことは、実証的諸事実や実践的諸体験に照らして、十分に推測できることです。

例えば、レスポンド条件づけの状況で、円と楕円を弁別しなければならぬ犬を改めて想起してみましょう。楕円を徐々に円に近づけてゆくと、犬はしだいに苛立ち、暴れたりするだけでなく、手足を噛んだりなどの自傷行為や、放眠したりなどの神経症的な諸症状を現わします。そして、再び実験室に入れられることに激しく抵抗します<sup>(11)</sup>。ところが、様相の違う実験室に入れられることには抵抗しません。また、弁別学習実験を経験したことのない犬は、このような障害状況に置かれても、神経症的な諸症状を現わしません<sup>(14)</sup>。このような諸事実が表わしているように、障害体験をした特有な場に即して神経症的諸症状が現われるのだとすると、せっかく複合対立的状況を即自的コンテクストへと包摂して、主題的優位性を確保できたのに裏切られたという思いの表われとして、これらの諸症状を積極的に意義づけることができます。つまり、自暴自棄的に見える神経症的諸症状ですらも、たとえ消極的な表現ではあっても、状況特性に対応して棲み分けようとする試みの表現ではないかと考えられます。そして、状況の仕組そのものではなく、その状況特性に即した「優位－劣位」関係を対自的主観へと包摂して自覚する布置が、即自的にどのように現われているかによって、状況への対処方略である決済態勢が、呪術的主観として表われるのだらうと看取することができます。

このことを実証例に即して省察するために、M. E. P. セリグマンによる、不可避的体験の効果についての実験を見てみます<sup>(15)</sup>。ハードルでX室とY室が仕切られている部屋に犬を入れます。X室の床に敷かれた電気格子に通

電すると、犬はびっくりして跳びはねたり、暴れたり、電気格子にかみついたり、あげくは失禁したりなどしますが、ついには、ハードルを飛び越えてY室に逃げることで嫌悪刺激を回避できることを学習します。このような可避的体験をしたことのあるM群の犬は、類似した障害状況に置かれるとすぐに能動的な回避行動を試みます。そのような能動的な試みは、障害を回避できた即自的な優位性を一般化して、その対自的布置関係の表われである世界を、まるで「この世界は、自分の制御下にある。」と表象しているかのように見えてきます。このような犬を工作者から見ると、「見所のある犬だ。」と能力を付与して、障害を仕組んだことの心理的負債を対自的に決済することができます。他方で犬もまた、「やればできる。」と自分の能力に優位性を付与して、負わされた心理的負債を対自的に決済していると看做することができます（私の有名化）。ここでは、工作者から見た犬の所与性と、犬から見た自分の所与性が一致して、心理的負債の決済態勢が犬の能力性によって表象されています。このような相互決済態勢の表現を関係づけたのが図1の第IV象限ですが、所与として表われる「私」というものの能動的主体性の表象を『自我』と定義します。自我は、共同主観的に覚知されている私に即して、能動的作用体としての所与性を対自化して有名的に表象した関係態です。自我は主体的有名性の表象だから、有名として自己表現すればするほど、無名的に表象されてしまうことを極度に恐れます。だから、その恐れを「分かれたくない。」という思いに既にとらわれて、いつも指示的かつ示威的に振る舞おうとします。

ところが一方、壁で仕切られたX室で不可避免的に通電を体験してしまったN群の犬は、仕切りをハードルに替えてY室へと逃避できる状況にしても、ただ無気力にじっとうずくまっているだけで、なんの試みもしようとはしません。そのような無気力ぶりは、回避できなかった即自的な劣位性を一般化して、まるで「この世界は、自分の制御下にはない。」と諦めて、対他的布置関係に自分を従属させてしまっているかのように見えてきます。このような無気力な犬を工作者から見ると、「やればできるのに、なぜやろうとしな



いのだ。」と苛立ちを覚えながら、「駄目な犬だ。」と無力を付与することで、障害を仕組んだことの心理的負債を対他的に決済してしまいます。他方で犬もまた、「どうせ、なにをしても無駄だ。」と自分の無力に劣位性を付与して、「無駄なことをしても仕方ない。」と諦め、負わされた心理的負債を決済してしまっていると看做することができます（私の無名化）。ここでは、工作者が所識化している犬の無力性と一致して、犬自身が所識化している自分の無力性が、心理的負債の決済態勢を既に意義づけてしまっていることとして現象しています。このような相互決済態勢の現われとして、対他的に現象してしまう「私」の受動的無力性を所識化する主観を『他我』と定義します。他我は、共同主観的に覚識される私というものの所識性が、受動的に無名化されて対他的に現われることです。このような他我は、無名のまま決済されてしまう不安におののき、その不安を「分かってほしい。」という思いに既にとらわれています。だから、いつも受容的に振る舞うことで、たとえ受動的ではあっても自己の存在性を現わそうとします。

ここで、協働する「私たち」と同型的な共同主観として表現される「私」というものが、能動的表象としての自我と受動的現象としての他我との統合態であり、既にそこで、被叙述的な有名性と無名性との分裂を孕んでいることを看取しなければなりません。そして、私にとっての私たちが私から分裂することで、その私たちが私とは異なる「他者」として現われ、この私を有名にも無名にもしてしまう策謀者として覚識されます。そのような策謀者としての他者性を自分自身の中に反照的に感知することで、言い知れぬ不安にとらわれます。そして、その策謀性を反照的に自覚することで、この他ならぬ私自身の中に他者性が現われてくる恐怖におののきます。

再び、逆転移行学習状況に戻って考えてみます。オペラント条件づけを観客に実演して見せるために、イルカが水面から顔を出すたびに調教師が笛を吹いてエサで強化します。すると、自発的に顔を出すようになります。次のショーで、調教師は尾ビレを出させてみようと言います。演技場に入れられたイルカは、すぐに顔を出すのですが笛が鳴りません。苛立ったイルカは思

わず尾ビレで水面を叩きます。すると笛が鳴って、エサがもらえます。三回目のショーでは、気まぐれな調教師のおかげで、尾ビレを出してもまた笛が鳴りません。こんな気まぐれ状況に置かれたイルカは、ショーのたびごとに、ただ前回で強化された行動をやみくもに繰り返しながら、笛が鳴るのを待つしかありません。十四回目のショーが終って、イルカは明らかな興奮を示し、次のショーでは、舞台に登場するやいなや八種類の際立った行動を含む演技を自発的に披露して見せました。それは、まるで「要するに際立ったことをやりさえすればよい。」と、自分の置かれたコンテクストを解釈したかのような振る舞いでした<sup>(16)</sup>。いわゆる荒れた生徒たちが、常識では思いもよらないことを、次々とやってくれる状況を想起してみれば、こんなイルカの振る舞いも十分に了解できるはずです。

ここでは、せっかく状況に即してミズカラ自発的に分化させた仲継ぎ行動型が原因となって、かえってオノズカラ窮地に落ち込んでしまう循環関係を看取することができます。協働的な私たちの私として、自分を対他的な能知者であると布置化しようとすればするほど、つまり、対他的に自分が優位に立とうとするほど、逆転して、気まぐれな複合対立的状況に劣位的に従属させられてしまいます。しかも、運しだいでは成功することがあることが逆に仇となって、即自的に優位性を作為する者に対する呪術的な対他的願望にますます縛られてしまいます。このことの裏付けとして、条件づけたオペラント行動を維持させるためには、反応のたびごとに強化する全強化の手続よりも、ランダムに強化する間欠強化の手続のほうが効果があるという実証例を挙げることができます<sup>(12)</sup>。即自的に協働することもある私たちが対自的な他者として現われ、私を私たちから作為的に分裂させようとする徴候を読み取るとき、その分裂を補完するために、私たちであるはずの者に自己脅迫的に従属して、ただ呪術的に儀礼行動を反復するしか術がなくなります。そこでは、私にとって協働的である私たちが、私に作為を働く悪意に満ちた他者として現われ、その作為的他者に対して、「分かりっこない。」という恨みを募らせます（私たちの無名化）。しかし、その即自的に増幅してゆく

恨みが原因となって、その私が、ますます私たちから分裂させられてしまう不安にとらわれてしまいます。その不安を解消するために、対他的には独り善がりではない呪術的な対他的願望の現われを、私であることを補完する拠点の表われであると自己充足的に看做します。図1の第Ⅳ象限に即して、私にとっての私たちである「私たち」から「私」が分裂する不安を緩衝的に補完するために、呪術的願望によって主観的に現象させる対他的拠点を『作為者』と定義します。作為者は、私にとっての私たちが協働的であると同時に作為的であることを能知していることの現われであり、その能知的他者が私に従属させていることを覚知している表われです。だから、「分かりっこない。」と反発しつつも、やはり、没我的に従属せざるをえません。ここでは、作為を働く能知的他者が、既にそこで、私たちそのものに内在していることを看取できます。私たちにとっての私が、私たちから分裂して他者性を帯びたとき、その私が「非我」として現われます。非我は、私にとって私たちがでない他者が、この私を私たちがでない他者として二重否定的に縛り返していることの現われです。そこでは既に、本来的に私たちであった私と私たちが、自分と他者へと分裂してしまっています。根が同じでありながら分裂的に自覚されるものだからこそ、私は私たちの作為性を反照的に覚知して、相手に対する自分の優位性を策謀しようとしします。

イルカが万策尽きて際立った行動をとったように、荒れた生徒たちが次々と思ひもかけないことをするように、協働的であると同時に作為的である能知的他者に対抗するためには、その二重否定性を解釈して、私自身もまた協働的であると同時に作為的に振る舞うことで、作為的他者が共同作為的な私たちとして表われていることを覚識することができます。しかも、イルカの作為に私たちが感嘆したように、荒れた生徒たちの作為に私たちが振りまわされてしまうように、作為的共演者として私を対自的に表わすことで、再び「優位－劣位」関係を逆転させることができます。このように、対他的に現われる対自的な逆転関係を、作為的共演の表われとして意義づけることができる能識者を『共謀者』と定義します。共謀者は、私たちが私と同じように

作為的であることを既に分かっているのです、今ここで表わしている私の優位性が作為的であることを、既に「分かれている。」という思いにとらわれています。だから、私の作為的優位性が分かれてしまえば、そのときには再び、共謀的な私たちの作為によって劣位に転落してしまいます。そこで、自分を見せかけの劣位に置いて、対自的に作為を表わす能識的共演者の顔色を伺いながら、その共謀者として自分を布置化してしまうことで、被作為的転落に歯止めをかけると同時に、対自的な優位性を対他的作為によって策謀します。

このような心理的機制を土居健郎が「甘え」の概念によって適切に表現しています<sup>(17)</sup>。しかし、大人になることができない青年の反抗を桃太郎の鬼征伐になぞらえて、甘えの現われとして解釈するだけでは、それが共謀的共演の表われでもあることを見逃してしまう恐れがあります。甘えと断じて済ませる風潮が世間に充満していますが、そこにこそ、私たち自身がまた、気まぐれに策謀する共謀者であることが如実に表現されています。だから私たちは、私自身が共謀者であることが即自的に表われることを恐れて、一方では、対自的に現われる作為を甘えと解釈することで、私の対他的な優位性を私自身に諮ります。他方では、即自的に表われる甘えを対他的作為によって決済することで、私の対自的な優位性を私たちと謀ります。このような主観的主体性の呪術的表現である決済態勢を、以下のように定義し、定義4と定義5を組み合わせ、図1の第Ⅳ象限のように主観的布置化を関係づけます。

定義5 逆転的「B/aパターン」（死—接近的固執性）

①相対的自己従属性

複合対立的に一对の系を構成するA項とB項とが、相対的に他項を主題化することで、自項の述定的劣位性を現わす。

②対自的拘束性

② B項の作為的有名性

対立的命題を対自的に作為するコンテクストを担っている  
と自覚される主題的優位性としてのB項

### ⑥ a 項の被作為的無名性

対立的命題によって作為的に述定されて、対他的に連動する帰属性によって拘束される a 項

図1の第Ⅳ象限では呪術的主観の布置を関係づけましたが、そこでは、私にとっての私たちが私を謀る共謀者として表われ、私たちにとっての私が私たちに諮る作為者として現われる二重否定的策謀性を看取することができます。このような主観的主体性は、一方で、共謀者の表象である「世間」を盾にとって、相手に対する自分の優位性をミズカラ策謀することができます。しかし、そこでは既に、自分もまた世間体にオノズカラ縛り返されていることを意識下に抑圧しているので、あからさまに世間を盾にして、自分の劣位性を断じられることを恐れます。他方で、相手が私たちに対する作為者であることを浮き上がらせてオノズカラ劣位に封じ込めることで、相対的に自分の優位性を策謀します。しかし、そこでも既に、ミズカラ作為をしている自分が浮き上がってくる不安に怯えます。自分の劣位性をミズカラ表わしてしまうことの不安と、自分の劣位性がオノズカラ現われてしまうことへの恐れが、主観的主体としての私を二重に拘束してしまいます。

主観は、対他的には呪術的願望を共演する者として自己主体性を表わそうとしますが、既にそこで、対自的には呪術的秘密を策謀する者としての自己従属性を現わしています。しかし、その呪術的な二重拘束性を即自的に省察することはありません。なぜならば、オノズカラ逆転していることを察して、ミズカラ逆転させていることを省りみることは、とりもなおさず、主観的主体性の崩壊であり、呪術的死を意味することになるからです。つまり、私たちにとっての私の主観は、私たちでない誰かである私に意識されたときに、その呪術的策謀性をオノズカラ現わしてしまいます。その現われは、私にとっての私たちの表われなので、私でない誰かである私たちに対する私の共謀性をミズカラ表わしてしまいます。もしも、その共謀性を私自身に即して読み取ってしまうならば、一方で、私が私たちでない誰かとして括られてしまい、他方で、私たちが私でない誰かとして括られることを否応なく自覚

せざるをえなくなります。私たちの私として有名であることを願望する主観的主体にとって、無名になってゆく自分を自覚させられることなど、とてもではありませんが耐え難いことなのです。

このような無省察で抑圧的な決済的共謀性は、主観的主体性そのものが、主観的客体性に呪術的に依存していることの反照的な表現なのだと考えることができます。ここに至ってようやく、なぜ私たちが、「～として～する（しない）のは当たり前だ。」という思いに、かくも強くとらわれてしまっているのかということを、改めて、私たち自身に即して明確に看取することができます。要するに、共同主観として協働的であると同時に共謀的である私たち自身の存在性そのものが、共演的相互障害を生成する再帰的構造態であることを自覚せざるをえません。共同主観としての「私」という者は、既に私たちのコンテクストに包摂されていて、その私たちのメッセージが私に即した事態として表現されているだけに過ぎません。だから、私たちの共謀者としての私自身もまた、その私たちに即した事態を協働的かつ作為的に棲み分けてゆかなければならないのです。このような共同的策謀性の結果として、どのような成り行きになるかについては、2章で垣間見たことでもあるので、もはや、これ以上の多言を要しないはずです。

## 〔7〕 おわりに：相互輔生への希い

再帰的函数とは、特定の函数の定義の中に、その函数自体を含んでいる函数を指しますが<sup>(2)</sup>、図1で関係づけた各象限の二重四肢的構造態は、「コト／モノ」のパターン（横軸）を「ミズカラ／オノズカラ」のパターン（縦軸）によって再帰的に関係づけて、複合的かつ重層的に構造化してみた仮説的統合態です。どの象限でも、成り行きの指示（ミズカラ・スル）を対自的に分節し、成り行きの布置（オノズカラ・ナル）を対他的に包摂し、事物の存在（オノズカラ・アル）を対他的に分節し、そして、事態の解釈（ミズカラ・イル）を対自的に包摂する循環的な関係づけが、一貫した再帰的構造態となっています。このような自覚的構成法を採ることで、認識対象（モノ）

と対象認識（コト）との相補性、および、棲み分けを実現する対象認識（コト）の公理的優位性を基本的前提として、今ここで棲み分けられている対象的認知世界を、事物（モノ）の集成態というよりも、もろもろの事態（コト）の集成態であると捉え返すことができたと思います<sup>(10)</sup>。

それぞれの象限の命名、および、それぞれの四肢態の命名については、読者の直感に重ね合わせを図りつつも、演繹的に定義を積み重ねることで、敢えて意味をずらしながら恣意的に命名しました。命名そのものは、ただ単に名目の問題にしか過ぎませんので気にされる必要はありません。それよりも、このような自覚的な躰系が織りあげた複合的かつ重層的な諸命題の意義を、読者自身の問題意識に即して深く省察していただきたいと希っています。とりあえずは、モノ的命名を瑣末的問題として脇に片付けておかざるをえませんでした。それが、今後の検討課題であることは十分に自覚しています。ご批判・ご助言をいただければ幸いです。

ウォーコップは<sup>(8)</sup>、「A／Bパターン」の根底に「生／死パターン」を見据えています。図1では、即自的可能態の「包摂／分節」の軸、および即自的可能態の「対自化／対他化」の軸だけしか描き出していませんが、第三の軸として、即自的可能態の向う側の極性を「生」と、こちら側の極性を「死」を仮想してみてください。そうすることで、「生／死パターン」の生成の表現として、図1の意味をよりよく直感できるだけでなく、安永による「ファントム空間図式論」<sup>(9)</sup>への橋渡しができることと思います。

私たちは既に、協働的であると同時に共謀的である私たち自身の存在性そのものが、相互障害を循環的に生成している源泉だと自覚することができました。しかし、既述したように、このような自覚は主観的死を意味する危険性を孕んでいます。そのことを恐れて、主観的主体は故意に自己反省を回避し、したがって自分自身への洞察を持たないままに、主観的客体を絶対視して依存します。その絶対性は、呪術的依存性の表われてあることを誰かによって意識させることによって意味を現わすのですが、その依存性を意識されたときには、もはや絶対性そのものが崩壊してしまいます。そこでは、ただ

気まぐれな専制性が現われるか、あるいは、甘え切った放縦性が現われるだけです。ヨブに対するヤーヴェの身勝手な仕打を見て下さい<sup>(18)</sup>。そのヤーヴェの身勝手さを読み取り、私たち自身の共謀者の中にヤーヴェを意識できるとき、私たちの自立を現わす道德性が表われます。

それが希れなことであることも、また、自己分裂への危険性を孕んでいることも十分に承知したうえで、相互輔生とは、このような自覚に基づいて、相互革生を希いつつ、逆転的パターンを再逆転させることだと定義します。つまり、工作者がミズカラ有名化することではなく、あえてミズカラ無名化することで、オノズカラ被作為的に無名化されてしまっている被工作者を、オノズカラ即自的な有名化が現われるように促します。その再逆転的体験を仲立ちにして、対自化と対他化との振幅が表われ、包摂と分節との複合的重層化が現われるかもしれません。私たち工作者は、性急であってはいけません。ましてや、気まぐれであってはいけません。気まぐれに依存して、絶対性を露呈するヤーヴェの身勝手さを思ってみて下さい。だから、勝手に悲観して諦めてもいけません。私たちに課せられた基本的役割は、しっかりと仮縫をしてあげることですが、時が熟したときには、うまく引き抜けるように上手に仮縫をしてあげなければならないのです。そこが、私たちの腕の見せどころです。その秘訣を論述したかったのですが、残念なことに、許された紙幅を既に大幅に越えてしまっています。仕方ありませんので、以下に、実践的工作者としての心得を思いつくままに列挙して、とりあえず本論を終えることにします。

- (1) 適時性：「発信－受信」関係の反転態勢のタイミングを見計らうこと。
- (2) 適切性：発信態勢と受信態勢のレベルに適合させること。
- (3) 適度性：度が過ぎないように注意すること。
- (4) 段階性：ていねいに順々に段階を踏むこと。
- (5) 共時性：補完的仲継ぎ項として常に傍らに居ること。
- (6) 共看性：成り行きを見とどけ、至りえた段階を下から見あげて、素直に喜ぶこと。



## 引用・参考文献

1. a. 深谷澄男・向井敦子 1986 心理学的対処方略としてのスルの視点  
とナル的視点の二重性  
国際基督教大学学報 I - A 「教育研究28」 pp. 101-126.  
b. 深谷澄男・向井敦子 1988 相互障害・相互輔生・相互革生の見と  
どけと工作の実践  
国際基督教大学学報 I - A 「教育研究30」 pp. 107-147.
2. 佐伯胖 1981 情報処理モデルで考える  
佐伯胖（監修） L I S Pで学ぶ認知心理学1：学習  
東京大学出版会 pp. 1-29
3. 廣松渉 1980 弁証法の論理：弁証法における体系構成法 青土社
4. 岡本夏木 1983 小学生になる前後：5～7歳児を育てる 岩波書店
5. G. Bateson 1972 佐伯泰樹・他（訳） 精神の生態学（上）  
思索社 1986 pp. 295-329
6. J. von Uexkull & G. Kriszat 1970 日高敏隆・野田保之（訳）  
生物から見た世界 思索社 1973
7. 今西錦司 1948 生物社会の論理 思索社（復刻版 1988）
8. O. S. Wauchope 1948 深瀬基寛（訳）  
ものの考え方：合理性への逸脱 講談社学術文庫 1984
9. 安永浩 1987 精神の幾何学 岩波書店
10. a. 廣松渉 1988 新哲学入門 岩波新書  
b. 廣松渉 1988 哲学入門一步前：モノからコトへ 講談社現代新書
11. I. P. Pavlov 1960 川村浩（訳） 大脳半球の働きについて  
岩波文庫 1975
12. B. F. Skinner 1972 *Cumulative Records* (3rd ed.)  
New York : Appleton-Century-Crofts.

13. D. S. Blough 1959 Delayed matching in the pigeon.  
*Journal of Experimental Analysis of Behavior*. 2  
pp. 151-160
14. H. S. Liddell 1954 Conditioning and emotions.  
In S. Coopersmith (Ed.) *Frontiers of Psychological Research*. San Francisco : W. H. Wreeman & Company. 1966  
pp. 130-138.
15. M. E. P. Seligman 1975 平井久・木村駿 (訳)  
うつ病の行動学：学習性絶望感とは何か 誠信書房 1985
16. G. Bateson 1972 佐藤良明・他 (訳) 精神の生態学 (下)  
思索社 1987 pp. 395-396.
17. 土居健郎 1975 「甘え」の構造 (第2版) 弘文堂
18. C. G. Jung 1952 林道義 (訳) ヨブへの答え みすず書房 1988

## GENERATIVE “A/B PATTERN” AS A SCHEME FOR PSYCHOLOGICAL ASSISTANCE

(English Résumé)

Atsuko Mukai and Sumio Fukaya

A sentence consists of Noun Phrase as subject and Verb Phrase as predicate. “Basic English” created by C.K. Ogden has only 16 verbs; be, seem, go, come, have, do, give, get, put, take, keep, let, make, say, see, and send. “Basic English” composed by 850 words restricts itself so rigidly, but it shows its fruitful ability to transform a lot of derivative verbs into these basic verbs. The 16 basic verbs could be classified into four categories as follows: “BE” expresses the presence of subject. “GO” shows the course of subjective events. “DO” is the expression of subjective working toward its object, and “HAVE” contingently relates the object with its subject. This suggests that a statement should be constructed as follows: the work of subject effects the development of events, the course forces the subject to cognize the existence of his object, the opposite introduces the contingent relationships between him and his opponent, and finally he recognizes himself as an agent. This circulating structure of a statement construction led the authors to understand functional recursiveness, which reveals itself whenever we come to know ourselves and others.

In this paper, the authors carefully examined some psychological paradigms, so that they could consciously refine their terms one by one not as an entity but as a relational function, and they could circulatingly accumulate their hypotheses about our psychology. Their enthusiastic effort converged upon the figure 1, which schematized the compound and

hierarchical system of the recursive function.

The authors presented some definitions in order to analyze functionally circulating recursiveness in our psycho-logic structure. First of all, "Mono" was defined as something which is possible to set its position as a subject in a sentence, and "Koto" was defined as some prescription which is possible to complete the sentence as a predicate. When a predicate has some contingency upon a subject, the subject carries some message, and the predicate determines its context. "Mono-ka" was defined as a subjective direction ready to carry some message, and "Koto-ka" was defined as a predicative orientation ready to realize its own context. So that, the first quadrant in the figure 1 was recursively structurized as an on-going process, which transforms possibility into probability. "Mono  $\times$  Mono-ka" was characterized as "Suru", which means "DO" as stated above. "Koto  $\times$  Koto-ka" was featurized as "Naru", which corresponds to "GO". "Mono  $\times$  Koto-ka" was called as "Aru", which shows "BE". And "Koto  $\times$  Mono-ka" was named as "Iru", which expresses "HAVE". Then, the authors arrived at their theoretical base-line in order to build the compound and hierarchical system of our psychology, which circulatingly proves itself as recursive function of "Suru (DO)  $\times$  Naru (GO)  $\times$  Aru (BE)  $\times$  Iru (HAVE)".

Secondly, the authors presented the five definitions on "Psycho-Generative A/B Pattern", which was originally derived from O.S. Wauchope, and was re-examined by H. Yasunaga. Definition 1 of "Complementary A/B Pattern" was characterized as a producing function of living vitality, which is essential to our psychological life. Definition 2 of "Interactional A  $\times$  B Pattern" was featurized as a generating function of living field, where we lead our living activities. Definition 3 of "Compound a/b Pattern" was perceived as a confronting function of living task to avoid complexity in our life. Definition 4 of "Hierarchical A/b Pattern" was cognized as an absorbing function of living dilemma by means of showing our self-dominance over the opponents. Definition 5 of "Reverse B/a Pattern"

was acknowledged as an intriguing function of double bound reversibility by means of pretending our self-indulgence toward the opponents. The first quadrant in the figure 1, which defines the first recursive context in the circulating course of our living activities, was constructed as the combination of the complementary pattern and the interactional pattern. The second quadrant, which signifies our behavioral consciousness oriented toward objects as a metacontext of the first context, was given as the combination of the interactional pattern and the compound pattern. The third quadrant, which differentiates our objective, cognitive propositions as a metacontext of the second context, was presented as the combination of the compound pattern and the hierarchical pattern. The fourth quadrant, which comprehends our subjective, emotional assumptions as a metacontext of the third context, was appreciated as the combination of the hierarchical pattern and the reverse pattern.

For the authors, a theory should be a recursive, deductive system of practical hypotheses, and could encourage us to keep ourselves in our own position for guiding “Mutual Assistance”. Some reconsiderations based upon the figure 1 have told us that “Mutual Obstruction” will be generated when we can not tolerate our own “Double Bind”. We incline to insist on our subjective dominance over the opponents too strongly only to indulge ourselves emotionally so that we might escape from the psychological dilemma. That’s because we, first of all, have to have a lot of sense and courage to fix our eyes on our own psychology, and we have to know with presence of mind what, how, which, and when to occur in ourselves. This will certainly guide us from “Mutual Obstruction” to “Mutual Innovation” through “Mutual Assistance”.